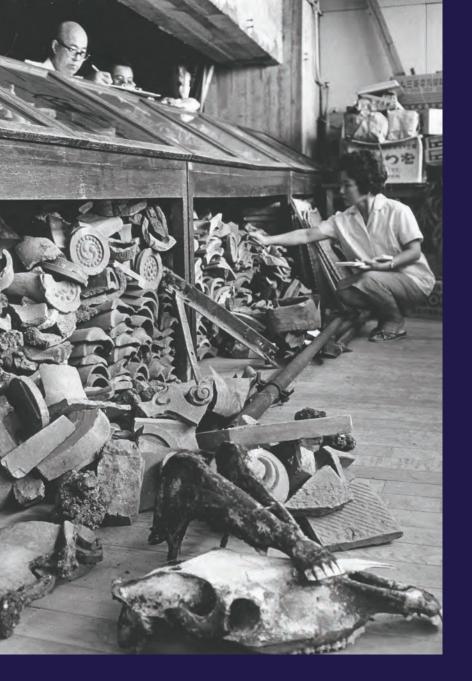
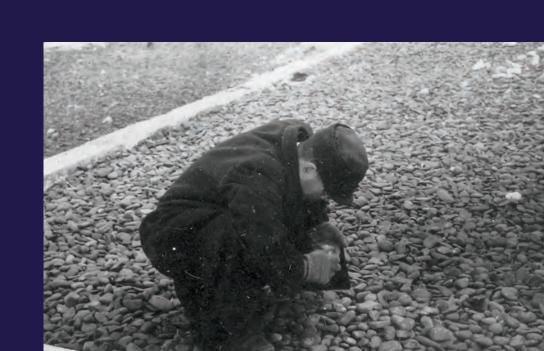
被爆75年企画展

広島平和記念資料館のあゆみ第一 部

礎を築く

--初代館長 長岡省吾の足跡





はじめに

広島平和記念資料館は、今年開館65年を迎えます。資料館では開館以来、被爆の痕跡が残る資料を展示し、原爆被害の実態を伝えてきました。その展示の基になったのは一人の人物が被爆直後から広島市内に入り、焼け跡から収集した資料でした。その人物の名は長岡省吾。資料館の初代館長です。長岡氏は資料を収集するだけでなく原爆に関する調査・研究を行い、生涯をかけて被害の実態を明らかにしようとしました。

この企画展では、近年長岡氏の遺族から資料館へ寄贈された資料を基に同氏の足跡をたどりながら、資料館が開館するまでの歩みと開館初期の状況について紹介します。

「もう二度と原爆の惨禍を繰り返してはならない」という強い思いで資料館の礎を築いた長岡氏。その情熱と努力に向き合い、被爆の実相を伝え続ける大切さを実感していただければと思います。



若き日の長岡省吾氏(左から2番目)

1901年(明治34年)8月11日 両親の移民先のハワイで生まれる。 1918年(大正7年) 広島市の修道中学校で学んだ後、中国大陸へ渡る。 1921年(大正10年) 中国東北部にあった哈爾濱(ハルピン)露支語専門 学校地質学専攻卒業。

卒業後は地質調査の業務に携わりながら哈爾濱博物館、満州鉱業株式会社などに勤務。日本や満州(現在の中国東北部)の鉱物や化石の採集家として学界でも知られるようになる。

1944年(昭和19年) 広島文理科大学(現在の広島大学)地質学鉱物学教室に就職。学生の指導にあたる。

焦土を歩いて

広島に原爆が投下された時、長岡氏は同じ研究室の教員や生徒たちとともに地質調査のため出張先の山口県にいました。翌日広島への爆撃を知った一行は出張を切り上げ、長岡氏は佐伯郡玖波町(現在の大竹市玖波)の自宅へ戻ります。被爆から2日後の8月8日、長岡氏は広島文理科大学へ向かうため、広島市内に入りました。大学へ向かう途中、広島護国神社の灯ろうに腰を下ろそうと手をついた時、刺されるような痛みを感じ、石の表面が溶けて針のようになっていることに衝撃を受けました。「石までが血を流し、泣いている」。長岡氏が被害の実態と向き合う日々の始まりでした。



被爆直後の広島市内

1945年(昭和20年)8月7日か8日 爆心地から710m 胡町 福屋百貨店

「灰の町と化した廣島。現在、悲惨極まるこのような姿が、現世に在るだろうか。この町が、私が見ている廣島がたった一発の爆弾で、全市が壊滅したとは、信ずることができない。」

「廃墟に佇つ」長岡省吾『ひろしま三十四号(第五巻第五号)』1950年(昭和25年)広島鉄道局より



全焼した広島文理科大学本館内部

1945年(昭和20年)11月3日 爆心地から1,420m 東千田町 研究室があった本館の建物は、外郭は残った ものの内部は全焼。長岡氏たちが苦労して集 めた岩石の標本や調査のための道具が失わ れました。職員や生徒は負傷し、留学生の一 人が行方不明となりました。



広島護国神社の大鳥居

1945年(昭和20年)10月1日 爆心地から150m 基町 凄惨な街の様子に長岡氏は疲労し、広島護国神社の大鳥居の 前にあった灯ろうに腰を下ろしました。その時、石の表面の変 化に気づきました。

「入口の燈籠に腰を下ろした。とたん掌に針でさしたような痛みを 感じた。よく見ると、花崗岩の表面が熔けている。『アッ!』と驚ろ いた。何度も見返したが、間違いなく熔けている。普通ではない。 特種な爆弾だと感じた。」

> 「廃墟に佇つ」長岡省吾『ひろしま三十四号(第五巻第五号)』 1950年(昭和25年)広島鉄道局より



広島護国神社の玉砂利を見つめる長岡氏

長岡氏は焼け跡に通い、資料の収集を始めました。被爆 直後に市内に入った影響からか高熱や下痢の症状に悩 まされることもありました。自宅から広島市内までの交通 費を確保するため持っていた地質学の本を売り、資料収 集を続けました。

積み上げられた金属類

当時、人々が焼け跡から収集したのは換金できる金属類でした。一方、長岡氏が集めるのは石や瓦。周りの人に笑われることもありましたが、信念を貫く長岡氏の姿に動かされ、家族だけでなく、学生や商店主など協力する人たちも現れました。収集対象はあらゆる物に広がっていきました。

「焼け野原の中から瓦、溶けて曲がったガラス瓶、トタン、レンガ類あらゆる物を集めてリュックサックや 段袋に詰め背負子に乗せながら長岡さんの自宅ま で運ぶ手伝いをしていました。」

当時学生で資料収集を手伝った松本正毅氏の証言より



溶けた皿の塊



変形したビール瓶



熱線を受けた瓦

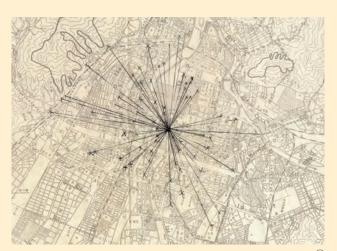
9



文部省の調査団に参加

1945年(昭和20年)10月16日 長崎·爆心地

9月14日、文部省の学術研究会議に「原子爆弾災害調査研究特別委員会」が設置されると長岡氏は物理学化学地学科会の地学班に参加し、10月に広島・長崎で調査を行いました。 焦土を歩き、熱線を受けた石や瓦を収集・調査し、原爆による影響を明らかにしようとしました。写真は長崎へ調査に赴いた時のもの。右の白衣姿の男性が長岡氏。



爆心地を推定するための線

地図上に複数の調査地点から測定した方角に向けて線を引き、線が交わった点を基に爆心地を推定しました。

長岡氏が導き出した爆心地と原爆の爆発点 爆心地は島病院。原爆の爆発点は高度570メートル。

*その後、長岡氏は広島平和記念資料館長の時に再検証を行い、爆発高度を606メートルと修正しました。現在は、島病院の上空600メートルで爆発したと推定されています。



銀行の石段の影を指さす長岡氏

爆心地から260m 紙屋町 住友銀行広島支店

詳細に調査を行う中で、研究者たちは石に残された熱線の影から原 爆の爆発点を明らかにできるのではないかと考えました。調査団で の活動が終わった後も長岡氏は爆発点とその真下の爆心地の特定 に力を注ぎます。市内を歩き回り6,000を超える膨大な数の墓石や 建物などに残る影を調査し、爆発点と爆心地を導き出しました。



方角の測定

原爆の熱線を受けた花崗岩は、表面がはがれて白っぽくなり、熱線を受けていない部分は元の色が影のようになって残っていました。クリノメーターと呼ばれる計測器を用いて、爆発点を求めるための角度と爆心地を求めるための方角を測定しました。



クリノメーター



墓石の影の方角を記した手帳

収集した資料の公開

地道に被爆資料の収集を続ける長岡氏のことは、やがて当時の濵井信三広島市長の耳にも入りました。広島文理科大学を退職していた長岡氏は1948年(昭和23年)に被爆資料の収集と調査を行う専門職として広島市に採用されます。同時に長岡氏が自宅で収蔵していた資料も広島市へ提供されました。

それらの資料を基に1949年(昭和24年)9月25日、広島市中央公民館の一室に「原爆参考資料陳列室」が開設。翌年の1950年(昭和25年)8月6日には中央公民館の北隣に原爆記念館が開館しました。職員は長岡氏のみで運営の予算もわずかでした。家族や友人の協力も受けながら資料を集め、模型や説明文など自分たちの手で展示をつくりました。また被害の全体像をつかむため、さまざまな調査を行い、その内容をまとめた冊子も発行して被害を正確に伝える努力を続けました。





濵井信三広島市長(中央)

アメリカ・ニューヨーク ブルックリンスタジアム 自らも被爆者であった濵井信三市長は、1947年(昭和22年) 4月に初当選し、広島市の復興事業を進めました。時間の経 過によって被爆の痕跡が消失し資料が散逸することを危惧 し、市民から資料を集めることも考えていました。

中央公民館に開設された「原爆参考資料陳列室」

1949年(昭和24年)9月 基町

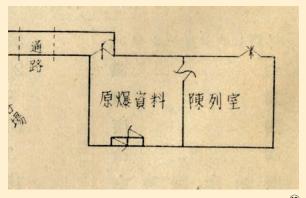
「原爆参考資料陳列室」には長岡氏が収集した熱線を受けた瓦や石などが展示されました。机や椅子の上に資料が置かれ、壁面には被害の範囲を示し、長岡氏が爆心地の位置を書き込んだ広島市の地図が貼ってありました。 広島で初めての被爆資料を展示する施設でした。



原爆記念館の開館

基町

1950年(昭和25年)8月6日、中央公民館の北隣に原爆記念館が完成しました。被爆資料は中央公民館の一室を出て原爆記念館で展示されるようになりました。



原爆記念館平面図

原爆記念館は木造平屋建てで、中央公民館とは通路でつながりました。2つの展示室に分かれていました。



被爆後のパノラマ模型

1953年(昭和28年)9月26日 基町

原爆記念館に入ると最初の展示室の中央には被爆後の広島 市内のパノラマ模型が置いてありました。爆心地から約1キロメートル以内の廃虚を表現していました。



増える展示資料

基町

原爆記念館が開館した当初の展示資料は被爆した瓦や石、 写真などが中心でしたが、その後、被爆した人々が身に着け ていた衣服が提供され、展示されるようになりました。衣服 はハンガーで吊るしたり、板に止めたりして奥のもう一つの 展示室に展示されました。写真では長岡氏がズボンの焼け 焦げた部分を指さしています。



壁面の展示

1952年(昭和27年)8月27日 基町

展示室の壁面には、きのこ雲や原爆ドームなどの写真が入った額や、爆風による郊外への飛散物、原爆の爆発の推移を示したパネルが並びました。手前の展示ケースには被爆した瓦や石が展示されました。



運営に協力する人

基町

原爆記念館の職員は長岡氏だけでした。一人で資料の調査や展示物の製作、来館者の対応に追われました。運営の予算もわずかしかなく年間数万円程度。暖房のための薪や炭の費用は自分で負担しなければなりませんでした。こうした状況の中、長岡氏を支えたのは家族や友人、資料収集の時から協力を続ける人たちでした。



原爆記念館を訪れる人々

1953年(昭和28年)6月8日 基町

原爆記念館は「広島市勢要覧」では観光施設として紹介され、観光バスも止まり国内外から多くの人が訪れました。新聞記事によると1953年(昭和28年)ごろには、一日平均日本人は約400名、外国人は約30名が訪れています。写真は原爆記念館を訪問したエレノア・ルーズベルト(元アメリカ大統領フランクリン・ルーズベルト夫人)氏を案内する長岡氏。

(24



被爆した馬の調査

1954年(昭和29年)5月31日

被害の全体像を知るため、長岡氏の調査内容は原爆による犠 牲者数、動植物への影響など多岐にわたりました。写真の馬は 爆心地から1,300メートル離れた場所で被爆しました。体の右 側に火傷を負い、ケロイドが現れました。



放射線量の測定

猿楽町

写真は原爆ドーム付近の放射線量を測定している様子です。 長岡氏は収集した被爆瓦の放射線量の調査も行いました。



冊子「HIROSHIMA」

1957年(昭和32年)8月6日発行

初版は1954年(昭和29年)発行。1953年(昭和28年)に作成した「廣島 原子爆弾による被害状況」の説明文とその英訳、長岡氏が新たに入手 した救護所内部の写真などで構成されています。製作にあたり予算と 人手が不足していたため、当時広島市渉外課長の新出政雄氏が仕事 の傍ら英訳を担当し、長岡氏の知人で堺町の玩具店店主の藤井寧氏 が約30万円の資金を援助しました。

「再びこれ(原爆投下)をくり返さない良心的誓いに基き多くの人々の心の底に訴えたい願いからのささやかな報告である。 原爆の被害は今も止むことなく続いている。われわれの研究と努力は更に続けられ深められることである。」

「HIROSHIMA」長岡省吾 刊行の言葉より



第五福竜丸の乗組員見崎吉男氏(左)と長岡氏(右)

1954年(昭和29年)3月24日~3月31日

1954年(昭和29年)3月1日にアメリカのビキニ環礁での水爆実 験によって日本の漁船第五福竜丸が放射能を帯びた「死の灰」 を浴びる事件が起こりました。長岡氏は第五福竜丸が帰港した 静岡県焼津市と東京に1週間出張し、乗組員から被災時の様子 を聞き取り、研究者が第五福竜丸の放射線測定を行っている写 真を収集しました。



東京での被爆資料の公開

1954年(昭和29年)11月25日~12月3日 東京都港区 1954年(昭和29年)11月25日から12月3日まで東京の日本赤十 字本社で日本赤十字社、広島市、長崎市が主催する「広島・長崎 原爆資料公開展」が開催されました。被爆から9年後も続く被爆 者の苦しみを伝え、国による治療費の負担を促すことが目的で した。動員学徒の遺品や放射線による影響などの展示により、人 への被害を伝えることに重点を置き、大きな反響を呼びました。

広島平和記念資料館の開館

長岡氏が日々原爆記念館の運営と被爆に関する調査に打ち込んでいた頃、爆心地付近の中島地区では平和記念公園の整備が進んでいました。被爆翌年の1946年(昭和21年)に復興審議会で爆心地に公園を整備し慰霊と平和の象徴となる施設をつくることが計画され、1949年(昭和24年)には、平和記念公園の設計競技が行われました。公園とその内部の施設のデザインが決まり、広島平和記念資料館の建設は1951年(昭和26年)から始まりました。工事は予算不足のため度々中断しましたが、4年半の歳月をかけて完了。長岡氏が待ち望んだ資料館が1955年(昭和30年)8月24日に開館し、長岡氏は初代館長を務めました。



平和記念公園の設計模型

145点の設計案が提出され設計競技の結果、当時東京大学助教授であった丹下健三グループの案が1等に入選。入選案は平和記念陳列館(現在の広島平和記念資料館本館)を中央に配置し、東の平和会館本館(現在の広島平和記念資料館東館)と西の会議場(現在の広島国際会議場)を廊下でつなぎ、アーチ状の記念碑、原爆ドームが一直線上に並ぶデザインでした。





広島平和記念都市建設法の投票を呼び掛ける人たち 1949年(昭和24年)7月

被爆直後から広島の人々はさまざまな復興計画を構想しましたが、財源が不足し計画は進みませんでした。こうした状況を 打開し、復興の原動力となったのは広島平和記念都市建設法 でした。1949年(昭和24年)5月に法律は国会を通過、7月7日 に住民投票が行われ賛成多数の支持を得て成立しました。



平和記念公園をデザインした丹下健三氏(右端)

1951年(昭和26年)6月11日

丹下氏は被爆前、広島高等学校で学び、広島市内で過ごした 経験がありました。また1945年(昭和20年)8月5日から6日に かけて、アメリカ軍による故郷の愛媛県今治市への空襲で、 母親を失いました。丹下氏は、平和は与えられるものではなく 自ら創り出すものだと考え、その思いを施設に込めました。

資料館のデザインの特徴

1952年(昭和27年)8月2日

資料館の外観は廃虚の中から市民が力強く立ち上がることをイメージし、柱で建物を支えました。柱は円柱ではなく力強さを出すため、変形し湾曲したデザインでした。開放された空間(ピロティ)からは公園を見通すことができました。

33



来館者に説明する長岡氏

1955年(昭和30年)8月6日

内部工事の完了に先がけ、資料館の展示室が一般公開されま した。8月6日からは原水爆禁止世界大会が広島で開催され、 各国からの参加者も資料館を訪れました。「この残酷極まりな い惨状を日本は勿論の事、世界の人々に見せる会館を作る必 要がある」。長岡氏が常に抱いていた夢が実現しました。



開館当初の展示室

1955年(昭和30年)

展示室を南西向きに撮影したもの。被爆後の広島市内のパノ ラマ模型も原爆記念館から移設されました。展示室には日光 をさえぎる壁はなく、光が差し込みました。



1955年(昭和30年)8月23日

資料館は1955年(昭和30年)8月24日に正式に開館しました。 展示資料は原爆記念館から移設されました。写真や衣服が 入った額がイーゼルの上に置かれ、熱線を受けた瓦や石が入っ た展示ケースが並びました。開館初日は600名を超える来館者 が訪れました。



開館当初の展示室

1955年(昭和30年)

展示室を東向きに撮影したもの。熱線を受けた竹、墓石、自転 車などはむき出しのまま展示されました。



開館当初の展示室

1955年(昭和30年)

展示室を東向きに撮影したもの。展示の後半 は、自立式のボードに原爆の急性障害や原爆白 内障、白血病など放射線による後障害について 説明する写真やパネルが展示されました。

開館当初のギャラリー

1955年(昭和30年)

資料館の北側、現在ギャラリーと呼ぶ場所は開館当 初、公園を望むテラスとして設計され窓にガラスは入っ ていませんでした。風や雨が直接吹き込む状態で、被 爆した鬼瓦や墓石がむき出しのままで置かれました。



開館初期に展示されていた資料



モンペの上着

爆心地から1,900m 西観音町二丁目 弘中カヤさん(当時63歳)は自宅の外に出ていた時に被爆しました。全身に火傷を負って顔は腫れ、眼も耳も区別がつかないほどでした。8月21日、カヤさんは水を求めながら亡くなりました。



ズボン

爆心地から1,200m 雑魚場町

修道中学校2年生の長尾孟良さん(当時14歳)は、建物疎開作業現場で被爆し、自分と同じように上半身にひどい火傷を負った友人二人を連れて自宅へ戻りました。4日後に救護所に収容され、母親が必死で看病しましたが、8月11日に3人とも相次いで息を引き取りました。



軍靴

爆心地から約800m 基町 被爆直後、救援のため広島市内に入っ た寄贈者が焼け跡から拾ったもので す。高熱を受けて靴底が縮みました。



金庫の中で変形した丼

爆心地から約1,100m

金庫の中に入れていましたが、火災の高熱により 変形しました。



革財布 45

爆心地から1,250m 基町 中国軍管区兵器部修理所

中国軍管区兵器部修理所長だった八束要さん(当時43歳)は勤務先で被爆し、建物の下敷きになりました。自身は、かすり傷を負っただけでしたが、部下58名が亡くなりました。毎日勤務先の焼け跡に通い、部下の遺骨や遺品を掘り出し遺族に届けました。これらの遺品は持ち主が分からず保管していたものです。



はさみ

爆心地から500m 材木町

小川イツエさん(当時21歳)が愛用していたものです。イツエさんは材木町の自宅で被爆し、家の下敷きになりました。8月8日、郊外の勤務先から自宅の焼け跡に戻った夫の春蔵さんは、まだ熱い土の中からイツエさんの遺骨と遺品を掘り出しました。

日々の業務

被爆10年が近づくと被爆資料の収集や保存、展示の強化 を求める声が強まり、資料館の開館に向けて広島市により広 島平和記念資料館条例がつくられました。

条例では具体的に下記の事業を行うことが示され、資料 館の役割が明確になりました。

- ・原子爆弾による被災に関する物件、模型、写真、記録、文献 その他の資料を収集し、保管し、及び展示すること。
- ・原子爆弾による被災に関する調査及び研究を行うこと。
- ・原子爆弾による被災に関する案内書、解説書、調査研究の 報告書等を作成し、及び頒布すること。





遺品の寄贈

1955年(昭和30年)8月5日中国新聞

資料館の開館に伴い、当初は少なかった遺品が寄贈により少し ずつ増えていきました。この記事は、現在も資料館本館に展示 している「三人の中学生の遺品」の福岡肇さんの学生服が、両 親から寄贈されたことを伝えています。

資料館

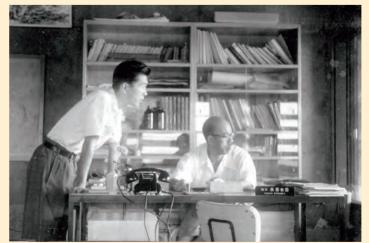
資料の保管

展示室には所蔵する全ての資料を展示できたわけではありませんでした。現在 のように温度や湿度が管理された収蔵庫はなく、資料は資料館の一角にあった 倉庫に保管しました。写真では長岡氏ら3人が収蔵資料の確認をしています。

長崎での調査

長岡氏は原爆記念館に勤務している頃から度々長崎へ出張し、 被爆資料の収集や長崎原爆資料館の整備に協力しました。原 爆の熱線による影を広島と同様の方法で測定し、長崎の原爆 のさく裂点や爆心地を推定しました。測定結果は1960年(昭和 35年)に長崎で開催された第二回原子爆弾後障害研究会で発 表されました。





館長室で

1955年(昭和30年)~1957年(昭和32年)ごろ

館長室は展示室入口横の階段を上がった場所にありました。館長となり被爆資料の収集に出かける機会は以前よりも少なくなりましたが、来館者の案内を行いながら、自室では原爆被害について研究を深めました。写真の机の横に立つのは、当時の職員で後に資料館館長となる荒田誠之助氏。

(50

熱線を受けた墓石を説明する長岡氏

1957年(昭和32年)10月26日

資料館が開館した年度の入館者数は約11万人、長岡氏が退館した1961年(昭和36年)度には50万人を超えました。世界中の人たちに被爆資料を通して原爆の悲惨さを実感してもらうために、長岡氏は指示棒を持ち、資料館を訪れる人たちを案内しました。写真では前インドネシア副大統領(当時)の一行を案内しています。

「ここに展示してある資料は、ただの焼けたビンとかカワラとしてではなく、原爆の恐怖を伝える遺品としてみてほしい。」

長岡省吾氏 1962年(昭和37年)2月1日中国新聞記事より



(51)



「原爆資料集成会後援会」趣意書

1954年(昭和29年)9月20日

長岡氏に協力し被爆資料の収集にあたっていた人々は、広島市中央公民館の一室に「原爆参考資料陳列室」が開館した頃から後援会を組織し長岡氏の仕事を支えました。後援会の名称は、その後「原爆資料集成後援会」、「原爆資料保存会」と変わり資料館に事務所が置かれました。資料館の職員が少ない中、被爆資料の収集や展示充実の大きな助けとなり、館内の売店の運営にもあたりました。



「原爆記念文庫」を整理する山﨑與三郎氏

1965年(昭和40年)4月13日

「原爆資料保存会」は被爆体験記や原爆をテーマとした文学作品などの文献を収集し、1965年(昭和40年)に資料館内(後に広島平和記念館へ移設)に「原爆記念文庫」を開設しました。収集の中心的役割を担った元教師の山﨑與三郎氏は、原爆でたくさんの教え子を失いました。山﨑氏は亡くなった人々への慰霊の気持ちで、地道に文献を集め続けました。

博覧会の開催

広島平和記念資料館は開館後、広島市で相次いで開催 された博覧会の会場となりました。

1956年(昭和31年)には全国巡回していた原子力平和利用博覧会が5月27日から6月17日までの日程で広島平和記念館と広島平和記念資料館を会場として開催されました。その2年後の1958年(昭和33年)には4月1日から5月20日までの日程で平和記念公園や平和大通り、広島城の3カ所を会場として広島復興大博覧会が開催されました。



マジックハンドによる実演

広島復興大博覧会ではマジックハンドが資料館に展示され、博覧会 用のつなぎを着たアルバイトの女子学生たちが操作しました。復興 博覧会の後にもマジックハンドは展示室に置かれ、職員が操作しま した。

展示室の変化

開館後、展示室のレイアウトは少しずつ変化していきました。 広島復興大博覧会の後は新たに製作された模型や展示された 資料が加わり、展示室の様相は開館当初から比べると大きく 変わりました。

パノラマ模型の変化と衣服の展示

1958年(昭和33年)5月25日

開館当初は方形だった被爆後のパノラマ模型が円形に変わり、以前より広い爆心地から約2キロメートルの範囲の被害状況を伝えるものになりました。パノラマ模型の側には、被爆した人たちが身に着けていた衣服を展示しました。衣服は額に入れ、あるいはマネキン人形に着せて展示しました。



広島復興大博覧会の会場となった資料館

1958年(昭和33年)4月1日~5月20日

広島市の人口と工業生産が戦前の水準を超え、復興の現状と 産業や文化、観光を紹介することを目的に広島復興大博覧会 が開催されました。平和記念公園内にもさまざまなパビリオン が建てられ、資料館は原子力科学館となりました。



広島復興大博覧会前売入場券

「修学旅行生などの団体客が入ると、呼ばれて操作していました。デモンストレーション用の物品を購入する予算はなく、家から道具や新聞紙を持って来ていました。金属の灰皿に墨汁を入れ、新聞紙に「平和」と書いて来館者に見せると拍手が起きました。」

当時の職員の証言より



57

資料館を支えた人たち

開館当初、職員は常勤、臨時職員合わせて8人でスタートしました。 わずかな人員と限られた予算の中、勤務する人たちは資料館を訪れる多くの人たちのために協力しあいながら、業務にあたりました。



資料館の守衛

館内には宿直室があり、日中の勤務に加えて、毎日夜の宿直がありました。守衛だけでは人数が足りなかったため、記念館、資料館の男性職員が毎日交代で務めました。

「守衛さんは、展示している額入りの服が振動でずれると外して 服を直したり、ケロイド標本のホルマリン液の交換などの作業も 行っていました。」 当時の職員の証言より



長岡氏(左)と広島平和記念館長を務めた舩倉逸郎氏(右) 記念館が開館した時に館長を務めた舩倉氏は、資料館が開館する以前から長岡氏と親交があり、展示製作や資料の収集などを手伝いました。

「本通りのお店でマネキンをもらって来て、被爆して焼けた服や破れた服を着せ、絵の具で人形に色を塗ったそうです。長岡氏と本川に入り被爆した瓦を収集したこともありました。父は長岡さんの事を尊敬していたと思います。」

舩倉淑子氏の証言より



観覧券の販売

開館当初の観覧料は13歳以上が20円、13歳未満は10円でした。入口に机を1台置いて料金を徴収しました。その後机は2台となり、やがてボックスがつくられました。

「観覧料は安かったですが、団体が入るとまとまった 額になるので大変でした。」

当時の職員の証言より



資料館の清掃を担当した二人の女性職員

「資料館の床はコンクリートだったので、とても暑くなりました。窓を開けて、じょうろで水を撒くのもお二人の仕事でした。」



広島平和記念館の職員たち

記念館の事務室で撮影されたものです。資料館の庶務の仕事は記念館の職員が行っていました。記念館、資料館、公会堂の職員で親睦会がつくられ交流を深めました。

「新広島ホテル(広島市公会堂に併設されていたホテル)のコックさんに頼んでオードブルを作ってもらい、私が大きな銀盆で運びました。みんなで飲食しました。」

当時の職員の証言より

衰えぬ情熱

1962年(昭和37年)1月末に長岡氏は自らが収集した被爆資料を広島市へ寄贈し、館長を退きました。健康が優れないことが理由でした。しかし原爆の被害を明らかにする情熱が衰えることはありませんでした。退任後も多くの人たちの励ましを受け、原爆のさく裂時に放出された放射線量を解明する調査に関わり、資料を集めるため市内を歩き回りました。また、広島平和記念資料館の顧問として館の運営にも携わりました。1967年(昭和42年)には広島平和記念資料館展示協議会の委員になり、現状の展示を見直し、医学的な資料の充実や展示環境の整備などを提案しました。

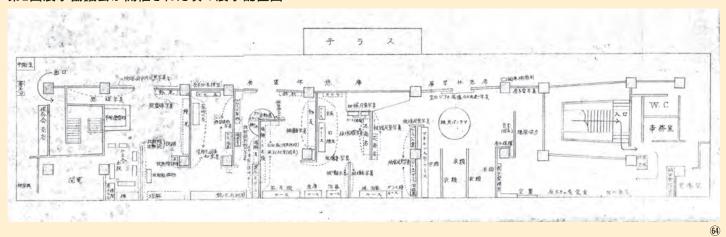


被爆した金属試料の収集

西地方町

東京大学の研究者により原爆ドームの鉄片から被爆時の放射線量が算定できることが明らかになると、長岡氏は爆心地から半径2キロメートル以内に残る建物や電柱などから金属片を集め始めました。

第1回展示協議会が開催された頃の展示配置図





新しい展示に向けて

1967年(昭和42年)5月14日

1967年(昭和42年)4月25日の第2回の会議で館の目的と展示整備の方針が示されました。展示構成の方針は、雑然とした配列を改善するため、原爆による熱線、爆風、放射線、高熱火災など事象ごとに展示するコーナーを設け、時間的な経過に沿って配置するというものでした。



展示の更新を伝える新聞記事

1967年(昭和42年)5月7日

中国新聞

時間的な経過が分かる展示とするため、導入部分の「原子力の平和利用につくした人たち」を紹介するパネルに代わり、被爆前の広島市について説明するパネルが置かれました。その後も展示室は少しずつ変化し、長岡氏が会議で訴えた展示環境の整備は資料館の最初の大規模なリニューアルで実現します。

(66)

おわりに

1973年(昭和48年)2月1日に長岡氏は71年の 生涯を閉じました。40代で原爆による被害を目の 当たりにした日から「自分が伝えなければならな い」という決意で被爆資料と向き合い、被害を解 明するための努力を重ねた人生でした。長岡氏 は、予算も人員も整わない厳しい状況にあっても、 世界中の人々にあの日の惨状を伝えることができる 展示を目指し、考え続けました。常に新しい研究 にも関心を寄せ、資料館の展示に取り入れようと 調査を進めました。

被爆の痕跡が残る資料を集め調査・研究し、被爆の実相を伝え続ける — 長岡氏の信念は広島平和記念資料館の「原点」です。長岡氏が資料館に託した思いは引き継がれ、やがて資料館は最初の大規模なリニューアルを迎えることになります。

図版一覧(敬称略)

①⑤~⑦⑨⑫⑬⑮⑫~⑰⑲⑲⑲⑨⑤⑯⑱~⑩⑫⑯長岡省吾収集 ②岸田貢宜撮影 岸田哲平提供 ③米国戦略爆撃調査団撮影 米国立公文書館所蔵 ④菊池俊吉撮影 田子はるみ提供 ⑧長岡省吾寄贈 ⑩渡邊武男撮影 東京大学総合研究博物館所蔵 ⑪⑱福島志津子提供 ⑭⑭広島平和記念資料館所蔵 ⑯濵井順三寄贈 ⑰⑱鉚璲~⑯⑪⑤⑯中国新聞社提供 ⑱⑩⑭⑯佐々木雄一郎撮影 塩浦雄悟提供 ⑲長岡省吾収集 「ひろしま公民館報第1号」1954年(昭和29年)10月10日より ②③広島市公文書館所蔵 ⑯~鄒大林組提供 ⑩弘中マサ子寄贈 ⑪長尾梅代寄贈 ⑫堤箽夫寄贈 ⑬内藤徳松寄贈 ⑭⑯八束要寄贈 ⑯小川春蔵寄贈 ⑩荒田誠之助提供 ⑯黒瀬真一郎提供(河本一郎資料) ⑯舩倉淑子提供

表紙写真 左上 福島志津子提供 右下 長岡省吾収集

上記の写真提供者をはじめ、長岡錬二、小島英子、渋谷和子、有安ヤス子、松本正毅、藤井真一、丹下都市建築設計(敬称略・順不同)ほか多くの方々、機関のご協力をいただきました。

被爆75年企画展

広島平和記念資料館のあゆみ 第一部 礎を築く-初代館長 長岡省吾の足跡

期間 2020年7月22日(水)~2021年2月23日(火・祝)

会場 広島平和記念資料館東館1階企画展示室

発行 広島平和記念資料館学芸課

730-0811 広島市中区中島町1-2

TEL 082-241-4004 FAX 082-542-7941 http://hpmmuseum.jp/